
バスケット・マリー

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビスケット・マリー

【Nコード】

N5277Q

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

研究所の下っ端に過ぎない彼に与えられた任務は、美少女アンドロイドとの三時のお茶だった。

彼はヤカンのお湯が十分に沸騰したのを確認すると、茶葉をティーポットにセットし、熱湯を注いだ。そして残りの湯で二つ分のカップを温めると、流しに湯を捨てる。

そろそろ彼女がやってくる頃合いかと、テーブルの上にポットと砂時計を置くと、コンコンコンと規則正しいリズムでドアがノックされる。

「どうぞ」

彼の口元が自然にほころんだ。ドアがすつと開くと待ち人が入ってくる。正確には「人」ではないが、どこからどう見ても人に見える、彼女が。

「もう、三時なんだな」

彼は目を細めて親しげに声をかけたのだが、その待ち人たる少女は、まったく愛想のかけらもない無表情で、

「休憩時間にうかがいました」

と、まるで彼とのお茶が任務であるかのような淡々とした口調で答える。

しかし、彼はちつとも気にせずに

「マリー、いつもの棚に入っているから準備してくれ」

と穏やかなまなざしを彼女に向けた。

「分かりました」

まったく無駄のない動作、まったくの無表情で、マリーは部屋の角に置かれた質素な棚からビスケットの袋と皿を二枚取り出した。

彼と、彼女の二人分。

決められた枚数だけ取り分けて、彼女はビスケットを再び棚に戻し、ビスケットの皿をテーブルまで持ってきた。

砂時計の砂の最後の一粒が落ちてしまっているが、ティーカップは空のままだ。

マリーの視線が彼に向けられた。

「お茶をいれないのですか？」

「今日はマリーにいられてもらおうと思って。やり方は知っているだろう？」

「はい」

抑揚のない声で答え、きっかり同じ量でカップに茶を注ぐ。

まるで、ロボットのように正確な所作で、完璧にエレガントだ。

もっともマリーは、有機ハイブリッドアンドロイド、機械と肉で作られた精巧な人造人間なのだから、ロボットと言っても大して間違いないだろう。

正式にはもつとややこしい立派な名称なのだが、彼の周りでは単に「アンドロイド」だけで通じている。「ロボット」というと、人が乗り込む巨大な二足歩行兵器というイメージが強すぎるので、それとこれとは別で、というのが研究所の、というよりも彼の周りの人間の認識だった。

しかし、アンドロイドにせよ、ロボットにせよ、どうせ開発には軍が大きく関与しているのは疑うまでもないことではあるが。

なにしろ、彼女を作るのに、けた違いの予算がつぎ込まれている。軍の中では、「ロボット派」と「アンドロイド派」が二大派閥を形成しているというもつぱらの噂である。今回、マリーが作られたということは現状ではアンドロイド派が優勢ということだ。もっとも、ロボット派もまだまだあきらめてはおらず、全自動美少女フィギュアを作るなどもつてのほかという意見もちらほらと彼の耳に入ってくる。

マリーの開発及び疑似人格を形成するソフトウェアの開発は、このフォールリーフフィールド研究所において至上命題であり、最新鋭の研究成果をたつぷりとそそぎ込まれてマリーは作られた。

たとえば、細身だが胸のあたりは少々肉感的なプロポーション、ゆるやかなウェーブのかかったブロンドヘア、無機質ではあるが、神秘的にも感じられるエメラルド色の瞳は、思春期特有の、子供か

ら大人へ移り変わっていく少女の危うげな雰囲気醸し出している。マリーに対して兵器という無粋なイメージを重ね合わせることは彼には出来ない。

一人の少女、それもただ見かけだけのことだと頭では理解していても、感情ではなかなかそうはいかない。

見かけじゃなくて中身重視などと世間一般では言うがとんでもない、見かけというのはまったく侮れない、重要な要素なのだ。

「おいしいかい、マリー」

ミルクをたつぷりと入れた紅茶を飲みながら、ビスケットを口に運ぶマリーに彼は問いかける。

この二人だけのお茶会が始まった頃は、マリーはテーブルに用意されたミルクに手をつけることはなかった。知識としては、ミルクティーの存在は知っていたはずだ。彼女は見かけ上の年齢、つまりロウティーンの女の子なら知っているであろう知識を人工知性ユニットに詰め込まれて製造されたし、今でも様々な教育プログラムを施されているのだ。

このお茶会も、ただの休憩時間ではない。

彼女の情操教育の一環としての意味がある。人間としての知識を詰め込まれた人形が、人のように感情を有することが出来るのか、というのもこのプロジェクトの命題の一つらしい。

お題目がたくさんありすぎて、下っ端研究員である彼には把握しきれない。そもそも彼の専攻は遺伝子工学ではあるのだが、研究所ではヒヨッコ扱いで、彼の仕事のどこがマリー製作に反映されたのか、そもそも反映されているのかすら、彼にはさっぱり分からない。彼女の、カップを持つ白い手の造形が、彼の仕事によるものだとはっきりと確信できたら、彼はもう少し自分自身に自信を持てるのだろうが、現状は所属グループの膨大なデータ収集と整理に追われるだけで、マリー誕生に関わったとはとうてい思えないのだ。

そんな彼に、なぜマリーとお茶会という仕事を与えられたのか。彼が、休憩時間には必ずしっかりと湯を沸かすところからはじめ

る紅茶好きであるのが関係しているのか、心理学の素人が関わった方がマリーの感情を組み上げるはずの自己育成プログラムに刺激を与えるはずという上層部の判断だとか、単に暇そうに見えたからだとか、同僚からも色々と言われたが、未だに理由は判明しないし、直属の上司も単にさらに上の上司からの指示だとししか言わない。

「これは重要な任務だから肝に銘じるように」

とにこりともせずしつかりと念を押す上司に、彼が逆らえるはずもなく、はじめのうちは梅雨の雨雲のようにどんよりした気分で始めたお茶会だった。

だけれども、初めてマリーを間近に見て、その気分もきれいさっぱり吹き飛んだ、というわけには行かなかったが、次第に薄れていったことは確かだ。

口数は確かに少ない。何を言っても、面白みのない返答で、正直落ち込んだこともいらついたこともある。しかし、少しずつ変化が見られるようになっていったのも確かだった。

はじめは彼が勧めなければ決してミルクを入れることはなかったが、今では何も言わずともたっぷりのミルクを紅茶に入れるようになった。

「今日の紅茶は少し濃いですね。私が失敗してしまったのでしょうか」

そう言つて、マリーはミルクを継ぎ足す。

「いや、僕がちよつと茶葉の量を多くし過ぎたんだと思うな。今度はマリーに一からやつてもらおう」

そんな取り留めのない会話をしながら、彼はビスケットに手を伸ばした。

対する彼女の皿は、すでに空っぽ。あつと言う間に食べてしまったのだ。

ちらりと彼は彼女の顔を盗み見た。物欲しげに彼のビスケットを見ているように見えたのは、気のせいだろうか。

彼女の人工知性ユニットは非常に優秀だ。どういう表情や行動を

取れば、「悲しげに見えるか」ということはとうの昔に学習済みだろう。

「僕の分をあげるよ。今日はランチを食べ過ぎたから」

そう言つて、ビスケットの残りを彼女の皿の上に置いてやると、彼女の唇にうつすらと笑みが浮かぶ。よくよく見ないと、そうとは見えないほどの微笑だが。

彼は、ビスケットを彼女に与えてよかった、と満足する。実際のところの胃袋は、液体だけでは満足できないと訴えているが、彼女のこの笑みでおなかいっぱいだ、と。そう思えるのが人間なのだ。はじめの頃、何を話しかけてもまったく無表情で、ゲームの登場人物でももう少し気の利いた受け答えをするとうんざりしかけたのは事実だけれども、ある日、ミルクのお代わりを勧めた時に、彼女が微笑んだ時のあの感情を彼は胸の奥にしっかりと刻み込んでいる。「ありがとうございます」

というすずやかな声音と共に。

まったく無機質なお人形が、人のような何かに変わった瞬間だった。

喜んでいる。少なくとも、そのように見える。そして、

「ありがとうございます」

と感謝していることを示す。

これは単なるプログラミングによるものなのか、それとも人間のような感情、この場合は「感謝」によるものなのか、はたまた、彼自身が、彼女に対して「感謝して欲しい」と願望を抱いていて無意識にその願望を投影してしまっているのか、実際のところは分からない。

でも、彼女を前にしているときには、あれこれ彼は悩んだりはない。

色々と理屈をつけようと、彼女が喜んだ、というのが彼にとってかけがえのない真実なのだから、

「どういたしまして」

と、彼も微笑んで返す。その時、彼の胸のあたりがじんわりと温かくなるのは、紅茶のせいだけではないのだ。

そうでなくて、彼女好みの紅茶の葉や、お茶受けを切らさぬよう準備はしない。

お茶の時間の話題は今では多種多彩だ。当初は単純に「はい」か「いいえ」のやりとりしか出来なかったのが、次第に、訓練の内容を自ら口にするようになり、さらに、

「数学の公式を証明するのがおもしろい」とか「外国語教師の発音が違うようだが、これは単純に下手なのか、どこかの地域特有の訛なのか」と彼女なりの感想を交えるようになった。また、彼の仕事内容についても知りたがる。

聞かれる度に、彼は少し困ってしまうのだけれども。基本的には大したことはやっていないという引け目もあるし、例外的にそれなりに大したことであることは機密事項とされている。

そこで、彼自身「大したことはしてないよ」と言いつつも、直接にはマリーに関係しないと思われる実験データの分析についてぐちをこぼすことになる。

いつもこんな感じで、お茶の時間は終わりを告げるのだが、今日のマリーは、ビスケットのお礼なのか、仕事の効率化について有用な提案をしてくれた。

彼は驚き、そしてやや複雑な心境で礼を言い、その提案についてチームと検討してみる旨を告げた。

「いつも、あなたにはお世話になっていきますから」

初対面の人間ならば、そっけないと思われるであろうその口調も、彼にはずいぶんと柔らかく聞こえるようになっていた。

だから、彼はいつもビスケットを切らさない。それが彼女の一癖の大好物だからだ。

ちよつと前のこと、同じチームの女性が差し入れてくれた有名なケーキ屋（名前は忘れてしまったけれども）のケーキを出した時、マリーはケーキを一口食べて、「おいしい」とは言ったモノの、か

すかな落胆の色を瞳に浮かたのを彼は忘れない。彼としてはビスケットよりもそのケーキの方がずっとおいしく感じられたのだけれども、マリーとお茶を楽しむにはビスケットが一番ふさわしいというわけだ。

「一日で、この時間が一番の楽しみです。みんな、私に人間らしくなれと言いますが、この時間が一番、人間らしいんじゃないかって、最近思うようになりました」

マリーがそう言って、ビスケットの最後のかけらを口に運ぶ。

マリーは、ビスケットを与えられて喜び。

マリーは、ケーキを口に運んで哀切な表情を浮かべ。

マリーは、お茶の時間を楽しみにやってくる。

けれどもマリーは怒ったことがない。

チャイムが鳴り、お茶会の時間の終わりを告げる。彼女は空のカップを流しに運んだ後、第三ラボへと足を運び、彼はお茶のカップを手早く洗いながら、今日のレポートはどう書くかと思案している。

素人視点による、マリーの観察レポートを提出すること。これが今の彼に与えられた一番重要な任務なのだ。

「お茶の時間が人間らしい、か」

ほんのひとときの美味しいものを食べて飲んで、おしゃべりする時間を過ごすことに、生きるための重大な意味はない。だけれども、その無駄が大切、それが人間らしいということなのかもしれない。

人に近いモノを作る為の研究。

外見も、内面も。

人と変わらないモノを作るための手間やコストを考えるならば、人そのものを生み、育てる方がよっぽど効率的なはずなのに、なぜ、こんなことをするのだろう。

ふと、彼はそんなことを思ったが、もちろんレポートには書かなかった。

少しずつマリーの感情が成長しているように見受けられる、というような内容が無難にまとめるだけだ。本当にそれが「感情」なのかどうかは分からないけれども、それを決めるのは彼ではない。上層部も、その方面では素人の彼にそういったことを求めてはいないことは確かなことだ。ただ、一般人の感覚で、彼女はどうか見えるのかという視点が欲しいのだろう。

「では、明日は私がお茶の準備を全部やってみますね」

「頼むよ」

そう言っただけのことを思い出す。もっとも人間らしいことをやってみようという彼女の要望だったが、彼はそれを誰かに告げる気にはなれず、そっと胸の中にしまいこんだのだった。

喜怒哀楽。

人間の感情の四つの要素で、マリーが見せたことがないのは、怒りだ。

なぜだろうと彼は考える。

素人判断で考えるに、恐らくはマリーの基本プログラムに「故意に、人を決して傷つけてはならない」と組み込まれているからではないか。もちろん、怒りという感情抜きに人が誰かを傷つけることは珍しくない。しかし、怒りにまかせて何かをしでかしてしまうということも度々あることだ。人ならば。

人を傷つけてはならないという本能が、彼女を怒りから遠ざけている。これが、マリーと人との一番の違いなのかもしれない。人が人を決して傷つけない、なんてことは、人の本能には無いのだから。もっとも、彼はマリーが怒ったところを見てみたいとは思っていない。なかったもので、それはそれで構わない。

ただ、マリーを人間らしく育てたいのならば、怒りの感情が抜けられているのは矛盾しているとも考えられないか。

マリーが怒ったらどうなるのか……もっとも、彼はマリーを悲しませたくとも怒らせたくもないのではあるが。

「はい？」

彼がレポートを提出した時、上司から告げられた言葉に、思わず彼はまぬけた声を発していた。自分の聞いたことは理解できるのだが、受け入れるには難しい命令だった。

マリーとお茶会の禁止。ということだ。聞き間違いであることを願いながら、

「禁止、ですか？」

そしてさらに念を押すように、もう一度、

「禁止なのですね？ 延期でもなんでもなく」

上司は渋い顔をますます渋くしてうなずいた。

「なんでですか？」

「それを君に言う必要はない」

それっきり、上司は口を開かず、パソコンのキーボードをせわしなく叩き出した。もう、彼と口をきく気はないという分かりやすいパフォーマンスだった。

「あ」

言い忘れた、というように上司が顔を上げて、彼は一瞬何かを期待したが、あっさりとそれは裏切られる。

「だから、特別手当ももう無しだからな」

それはそれで、彼をがっかりさせる一因にはなったが、もっと肝心なのは、マリーと会えない、ということだった。

なんてこつたい。

彼はふらつく足取りで自分の薄っぺらいクッションのイスにどすんと座り込んだ。頭の中に浮かぶのは、昨日の夜、新たに買い足したビスケット、そして、次に買おうと目を付けていた茶葉のこと。そして、今使っている百円ショップのティーカップではなく、デパートで新しいティーセットをそろえてもいいかな、と思っていたのに、その必要がなくなってしまった。

なにより、マリーにお茶の準備をしてもらうという約束は果たさ

れない。

彼は、自分が怒っているのか、悲しんでいるのかよく分からない。ごちゃ混ぜの感情で胸がいっぱいになってしまい、頭の方もぐちゃぐちゃになって、内面はとんでもないことになっていた。それでもいつもの習慣というやつで、なんとか仕事をこなし、休憩時間にはついつつかり二人分の紅茶を飲むはめになり、レポートを書く手間が無くなったことをやるせなく思いながら、先輩にどやされながら新しい実験の助手を勤め、データを収集・解析作業に従事し、これがマリーに直接関係することなのかとそんなことを思いつつ、ふとしたはずみで、「マリーは元気ですか？」などと上司にうつかり尋ねては、「それを君にいう必要はない」と返される、そんな感じで一日が過ぎ、同じようにさらに一日、一日、過ぎ去っていき、二週間ほど経っていった。

同僚に、やたらマリーのことを気にするなんて、お前もしかしてお人形に惚れちゃったのか、このロリコンめ、みたいなことを真顔で言われ、

「そんなんじゃないんだけど……」

と、彼は口ごもる。

マリーは大切な、なんだろう。茶飲み友達、だろうか。自分の子どもというには大きすぎるし、賢すぎる。

「妹みたいな感じだったから」

彼は、あまり可愛くなかった自分の妹のことを思いつつ、そういうことにした。

実際はそんな単純なものじゃなくて、表現するのにふさわしい言葉が見つかりそうになかったのだけでも。そもそも、そんな便利な言葉が実在するのも彼は分からなかった。

そのうち、風の噂とやらで、彼はマリーについてちらほらと耳にするようになっていった。

曰く、今までのプロトタイプでは見せなかった反応を見せるとか、曰く、予想以上の効果を上げているとか、あるいは、想定外のこと

になりつつあるとか。

彼にわざわざ聞かせるものもあれば、エレベーター内で乗り合わせた他部署の研究員の会話からの噂話もあった。

「まあ、元気なのはいいことだけどな」

そんなことも聞いて、彼はほっとする一方で、胸に引かかったままの言葉もある。

想定外。どんな風にだろう。

その言葉は彼を不安にさせる響きがあった。

どんな風に？

「こんなことになるなんて、思ってもみなかったよ」

彼は、口に出して言ってみた。やれやれと首を振って、肩をすくめてもみせた。鏡に映る自分自身に向かつて。ところが、トイレに誰かがやってくる気配がしたので、あわててすたこら逃げ出してしまった。

人の生き方なんて、始めに思った通りにいかないものだ。彼の将来の夢は喫茶店のマスターだったはずなのに、なぜかこんな研究所で働いている。それはそれで不満は、まったく無いわけでもないが、それなりの満足、人生なんてそういうものだ、なんて悟ってしまつたわけでもないけれど、様々な要素が重なり連なり、ピンホールの玉のように色々な出来事に弾かれ続けている。

だから、この先まだ何が起こるか分からない。ある程度の軌道の予想は出来るけれども、どこにピンや穴が潜んでいるのかさっぱり見えない。

そして、今日もお茶の時間がやってきた。今日のお茶受けは、昨日のスーパーで安売りしていた賞味期限切れぎりぎりのみたらし団子だ。マリーの為に買い足したビスケットは、同僚にすべて無料で引き取ってもらった。あまり美味くないとぼやきながらも、同僚はそのビスケットを毎朝の朝食にしているようだ。

砂時計の砂がこぼれ落ちたのを確認して、彼はティーポットに手を伸ばしたその時だった。

まるで、マンガか映画のような素晴らしいタイミングで、天井が崩れ落ちた。がらがらどしゃんと激しい音と共に、彼の目の前でがれきが降り注ぐ。

その様子を、彼は呆気にとられて見つめる。身体が動くことを忘れてしまったかのように、ぴくりとも反応しない。

「すみません、お怪我はありませんか」

頭上から、懐かしい声音が聞こえてきた。

ようやく彼は首をぎくしゃくと首を曲げて、上を見上げた。

大穴から、マリーが心配そうにのぞき込んでいる。心配そうに、の具合がいつもよりはつきりと分かるようになったのは彼の気のせいかもしれない。けれども、彼にははつきりとそう見えた。

マリーが、彼を心配している。

「なにをするんだ」

「やめなさいっ」

上から野太い怒号が聞こえる。ひょいとマリーは立ち上がり、彼の視界から消えた。続いてなにか鈍い音が響くと、複数の男達のもめき声が続いた。

そして、軽やかにマリーは天井の穴から落ちてきた。なんでもないことのように、すんと足から着地。普通の人間だったら、大怪我ものなのに、やっぱりモノが違うなと彼はぼんやりとそんなことを考えてしまった。

「さあ、お茶をしましょう」

ほんのり頬を染め唇に笑みを浮かべて、マリーは彼を見つめた。

「言うことを聞きなさい、マリー！」

穴から身を乗り出して、初老の男が声を張り上げている。頬が腫れ、額から血が滲んでいる。

「うるさいっ」

マリーの表情が一変した。それはまさに怒り、としか表現のしようのない顔。眉をあげ、目を見開き、その声は震えていた。

おかしい、と彼はごくりと喉を鳴らす。

彼女は決して人を傷つけない、そんな風にプログラミングされているはずだ。

「私は、ずっとお茶会を楽しみにしてたのに…… そう言ったはずです。お茶会をしてはいけないから、正当な理由を述べてほしいと私は要求しました」

「だから、これは上層部の決定で……」

「マリー、落ち着いて」

上の男に向かって怒りを露わにするマリーに、彼は一步一步ゆっくりと近づいていった。

マリーは一瞬、ちらりと彼の方を見、小さくうなずくと、再び上を見上げ、叫んだ。

「お茶の時間を否定するのは非人間的行為と判断します。つまり、否定するあなた達は人にあらず、です」

言いたいことだけ言つてすっきりしたのか、彼女はぐるりと周りを見回し、がれきのせいでつぶれた棚を見てため息をついた。

「お茶どころではなくなつてしまいましたね」

「まったくだよ」

彼はがれきの中心でしきりに頭を降った。

それは単なる言い回しに過ぎないのに、彼女はこの言葉一つで、「人を傷つけない」という大原則を破ってしまったのだろう。これでは他にどんな屁理屈をつけて、何をしでかさかかったものではない。なんて穴だらけでいい加減なプログラムなのか。

彼女に組み込まれた自己学習プログラムに「お茶会を禁止された」という負荷がかかり、それに対処するために、彼女は必死になったのだろう。

その結果が、これだ。

彼女はついに怒った。そして、この事態が起こった。

怒りの力は破壊を生み、非創造的だ。その一方で、人を傷つける反則的判定手段を創造してしまった。

人を傷つけてはいけないという大原則を守る為に、彼女自身独自

の人の定義を作り出してしまった。

こんな理屈、人間には到底出来ない。やっぱり、彼女は人間ではない。いや、へ理屈をこねまわすのは、人間らしいとも言える。

「ごめん、マリー。ビスケットを今、切らしているんだ」

彼はもごもごと口を動かし、彼女の反応を待つ。

果たして彼女は悲しむのか、それとも、それとも怒るのか……。

その答えは、予測不可能。

(後書き)

真のジャンル・えすえふっぽいの

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5277q/>

ビスケット・マリー

2011年1月30日22時11分発行